

槐

かい

岡井省二創刊

平成26年3月号



平成二十六年三月一日発行 第二十四巻第三号 通巻第二百三十三号 毎月一回 日発行
平成二十五年九月十八日第三種郵便物認可

一隅を照らす

高橋将夫

闇汁にもきつとあるはず残り福
風邪ひくも天災戦禍には遭はず
本鮪尻尾ぶち切り並べらる
冬耕の途中忘我の時のあり

西方に浄土東に冬の海
冬夕焼プラトニツクな恋に似て
瞑想は冬銀河よりはてしなし
狐火や青色発光ダイオード
煤払顔を見合はせ終へにけり
悟りなど無いと悟つて日向ぼこ
天体の一隅照らす冬灯

(以上「俳句四季」十一月号より十一句)

槐安集

水野恒彦

百骸の軋みてをりぬ冬銀河
かざはなや風狂の徒に触れて消ゆ
霜の菊詰めたる柩思ふべし
思惟きらきら花柵のこぼれれ落つ
枯野原落暉に音のありにけり

加藤みき

初星や去年逝きし人挙りたる
腸はみんなもいろ去年今年
母が家の隙間風なりなつかしき
若水を猫に鼠に分かちやる
初鶉とび歩きして付いてくる



中島陽華

天高しイルカは玉をひよいと受け
行く秋の箱に二本の和ろうそく
焼き栗三つ食し卒塔婆小町かな
悴む手父の忌修しぬたりけり
熊楠のデスマスク見し大紅葉

竹内悦子

妊るや十一月の曼陀羅華
味噌汁に絹の豆腐や鳩
天鷲絨の黒きコートや波羅蜜多
夜遊びの鮫鱈鍋となりにけり
空をゆく犀も鯨も十二月

雨村敏子

洗ひ上げし赤蕪の水暮のいろ
大年の水の音する粟田口
うかれ出て冬至南瓜ころがれる
土佐みづきの黄葉あかり阿弥陀堂
寒蘭の鉢を抱きて父の家

近藤喜子

時の重さを冬蝶の翅にかな
寒林に澄みきつてくる眼かな
人の世の祈りの数よ冬銀河
凧や大三角の鳴りさうな
何もかも乾ききつたる霜の声

本多俊子

裸木に精気の声を聞いてをり
忘れたきことは忘れず石路の花
伝へきし芭蕉の紙衣愛しめり
大綿の夕ぐれ時を知つてをり
冬將軍にゆるされてをり鯛旨し

瀬川公馨

狸穴につつころぼしの男かな
しんとく丸てふ説経節の年の暮
掛け取りや冬の日裏法体ぞ
寒林に幻の門ありにけり
花枇杷をおもはず髪にココシヤネル

久保東海司

雪浴びの一对の鳩潜りづめ
しぐれぬる音になじみて酒を酌む
神苑の落葉溜りを均らす鹿
磨ぎたての刃物使はな去年今年
髪かたち替へて晴れ着を恵方道

中野京子

赤々ともゆる山々冬に入る
闇をさく冬三日月の笑ひかな
偶然をかさね行く年万華鏡
アクセルを強く踏みける師走なり
思ひ出のつまる重さの年行く夜

柳川 晋

水母なす国のいしずゑ海鼠かな
眠らない街に潮の目去年今年
奇跡より秘伝が人気聖夜劇
夜の焚火ここには美男美女ばかり
ヘンゼルとグレーテル来て闇夜汁

岩下芳子

飼育箱の数多の命春を待つ
冬日向板に貼りたる鱭いろいろ
農大の大根を引く応援団
端溪の海に注ぎし寒の水
山深く體やはらかく冬眠す

近藤紀子

粗櫛の末雪催ひ楠葉宮
年用意軍手荒縄棕櫚箒
ポインセチア心の燃えしときのこと
亡き犬の血統書捨つ十一月
冬の虹二つ見し日を幸と記す



槐市集

有松洋子

宇宙より大きい字を書け筆始
凧や山の稜線張りつめて
寒灯に闇のすばやく後退る
またすこしいのち透きつつ年迎ふ
めでたしで了る話の囲炉裡端

犬塚芳子

冬の三日月舟に乗せたし天女かな
飛行船闇に余韻を冬の空
アボカドを二つに切つて罰はなし
実南天首の重さよ真つ赤か
葉牡丹の笑顔をもらふ日向かな

犬塚芳子

天帝に委ねて石路の花明り
ゴッホの黄木枯来る気配あり
南天の実のたわわなる別れあり
冬帝や健在かわがランゲルハンス
先の世へ風の透きゆく枯尾花

井上静子

襟元のしやきつと決まり初詣
神灯に裏白の葉の焦げにける
三つ指をついておしやまな年始客
二股の大根抜かれしあかんべえ
身ほとりのもの揃ひたる炬燵かな



岩月優美子

梟の一こゑ闇の深くなる
行く年や気休めに置く本の数
暖房の部屋恐竜とうつつ人
寒林に研ぎ澄まされし餅かな
ポインセチア赤々神の愛あれば

江島照美

紅よりも銀杏落葉の黄の光
枇杷の花微かに残る過去の人
天高し昔揚屋の槐の木
襟足の白さ際立つ紅葉茶屋
錦秋やだらりの帯を追うてゐる

熊川暁子

極月を駈ける電光板の文字
長き夜の柱時計のなかりけり
オカリナの音にはじまる虎落笛
思ひ出といふ絵になりぬ返り花
浄土より母の来さうな冬日和

桑原逸子

碑の宇治先陣や草紅葉
干柿や信濃の空を軒先に
なり止まぬ神鈴肅と去年今年
ゆく年や小手をかざして送りける
もがり笛打明け話あのねのね

後藤マツエ

酒好きの夫をいたはり寒蛭
凍て滝や人は孤独を道づれに
崩崩る古刹に石露のひかりをり
葱汁や浄土は心の中にある
湯たんぽの温みやはらか母の胸

阪倉孝子

渺渺々と黄葉浄土歩み行く
節ぶしの錆をおろして柚子湯かな
人の世の肩肘張らず寒鴉
言霊のとぎすまさるる枯木立
訃報聞くや色深まりし龍の玉

槐集

高橋将夫選

寒月光に罪はなかりし己が思惟
岡崎 犬塚 芳子

純白の山茶花何も寄せつけず

鬼柚子の武骨も愛嬌見てあきず

石路の花競ひて日輪恋うてをり

田の神の去りて冬田の無表情

冬北斗空也の鉦の音の散る
京都 竹中 一花

愛宕の灯星につらなる除日かな

狼や吉野に深き星の色

さざ波の傍へに干すや赤蕪

葉牡丹や胸平らなる母とをり

もみぢ散る水のみに散る恋に散る
枚方 熊川 暁子

一步づつ欲捨てて行く大枯野

目貼して心をとぎすにはあらず

年の尾のむねの縫ひ目を吹かれをり

流れ星賜り数へ日一つ消ゆ

鷹舞うて山に緊張あるがごと
大阪 江島 照美

目なじりに潜む炎や帰り花

艶路と粹にかかれし石路の花

柚子もぐや撓みし枝に疎ありき

一文字に我と同じく裏表

凝縮せし命輝き滝氷る
有松 洋子

虚空より腕が出凍蝶をつかむ

凍空を割つてアポロン疾走す

誰も傷つけたくなくて星凍てる

クリスマスこの世に塵のなきごとく

遠ざかるものは追ふまじ冬の虹
岡崎 犬塚李里子

枯野星地球の呼吸の荒くなる

よすがなき人の安否や鷹の声

竜の玉人みな序列なく老ゆる

忘れたきことを絡めて落葉掃く

銀河往来 高橋将夫

田の神の去りて冬田の無表情 犬塚 芳子
人れも終わり冬になると田の神はどこかへ帰るそうだ。冬田の寒々とした景を無表情と捉えたところが作者ならではの感性。〈鬼袖子の武骨も愛嬌見てあきず〉〈右路の花競ひて日輪恋うてをり〉もおもしろい。〈純白の山茶花何も寄せつけず〉には緊張感がある。

冬北斗空也の鉦の音の散る 竹中 一花
「鉦の音の散る」がよい。まるで鉦の音が飛び散って満天の冬星となって輝いているようだ。〈愛宕の灯〉が星につらなる除日かなの句では「愛宕の灯」が「星につらなる」という視点が素晴らしい。

流れ星賜り数へ日一つ消ゆ 熊川 暁子
星が流れて、星の一つが消えた。時が流れて、大晦日までの日数が一日減った。季語の「数へ日」がよく利いている。

一文字に我と同じく裏表 江島 照美
「一文字」はネギ。ネギを切り開いたときの裏表の感覚を人の心の裏表になぞらえたところに作者ならではの視点がある。〈鷹舞うて山に緊張あるがごと〉は緊張感のある立句。

凝縮せし命輝き滝水る 有松 洋子
凍結した滝の輝きと、人が何かに集中し、命を燃やすときの輝きには通底するものを確かに感じさせられる。

忘れたきことを絡めて落葉掃く 犬塚李里子
忘れたいと思うことほどなかなか忘れられないものだ。そんなもろもろはこの際、落葉と一緒に掃き捨ててしまおう。

裸木となりゆく木々の声を上ぐ 前田美恵子
冬になると枯葉が散るのは当然のようだが、どうもそう単純ではないらしい。どうやら、声を上げているという裸木の声なき声を聞いてみる必要があるようだ。

元旦や森羅万象如意宝珠 山根 征子
元日の景にはどこか常にないものを感じる。敵かめでたい気が四方に漂っている。全てが如意宝珠。〈ふる里はトンネルばかり山眠る〉は素朴で好感の持てる一句。

冬銀河生と死淀みなく流れ 岩月優美子
一切の生と死の様相、宇宙の真理が見事に捉えられている。

大綿の隠し持ちたる火種かな 寺田すず江
一寸の虫にも五分の魂という。それにしても、初冬に飛ぶあの弱々しい綿虫が火種を内に秘めているとは。

(以下略)